

資料 女子跳躍技の変遷

—1964年東京オリンピックから

1979年世界選手権大会までの資料を中心に—

中山光子

はじめに

近年、体操競技はめざましい発展をとげている。特に女子における跳越技の進歩は顕著である。しかし、体操競技の跳越技変遷を系統的に調査研究した報告はあまりみられない。

世界における体操競技大会の大きなものには二つの試合がある。その一つは、オリンピック大会であり、もう一つは、世界選手権大会である。世界選手権大会はオリンピック大会の中間年にあり、結局2年に1回は大きな世界の大会がある事になる。(但し、1978年から毎年世界選手権大会が開催される事になった。)

本資料では1964年の東京オリンピック大会から1979年のアメリカフォートワースでの世界選手権大会までの跳馬における跳越技を調査する事により、最近15年間の女子一流選手の跳越技の変遷を明らかにしようとした。

方 法

対象は1964年のオリンピック大会から1979年の世界大会までの計9大会における上位入賞者5名である。各選手が演じた跳越技はフランク・エンドウ K・K 出版の8mmフィルムにより調査した。

結果と論議

表1は種目別選手権での1位から5位までに入賞した選手名と跳越技を示したものである。種目別選手権とは団体総合選手権(規定問題+自由問題)において、各種目の得点順により種目別選手権出場資格を得て、種目別選手権での得点と団体総合選手権との得点を+して2で割った結果で成績を決定するものである。

表2は、各大会での上位5名の計10回の試技(1人が2回の試技)のうち、どの様なとび方が何

回出現したかを示している。

1968年のオリンピック大会と1970年の世界選手権大会で上位入賞者の80%が演じた屈身前転とびは、1974年以後は上位入賞者ではみられなくなった。また最近の傾向として同一選手が1回目の試技と2回目の試技で演じる跳越技が異なり、多様化していることが考えられる。

図1は各跳越技をわかりやすく示した。左から右に移動している。

図2は、現在の跳越技の難易度を基準にして各年における難易度数を示したものである。跳越技の左から右にいくほど、難度の高い技になってきている。

現在では1964年の東京オリンピック大会に試技された技は、最も基本技とされており、練習における第2段階で行なう跳越技である。1979年のフォートワース大会では、この1964年の跳越技を基にして、第2飛躍(跳馬に手をつけてから後の動作)に技巧を加えていくまでに発展してきている。

図1の下に跳越技の価値点の変遷を示した。体操競技は10点満点で採点される。ここに示した、9.0とか9.2と書いてあるのは、最高な試技をして、9.0の価値点技は、9.0満点の得点しか得られないということである。

次に規則がどの様に変遷したかを述べる事にする。

1968年度版規則(種目別選手権)

①選手は2回の跳越を実施する事が出来、そのよい方の実施点数が得点とされる。

②2回の跳越は異なることが許される。

③跳越に関して助走前に基準表の番号を審判に明示する。ただし2回目の跳越も同じ場合には1回目についてのみ明示する。もし明示した番号と異なる跳越をした場合は0.5の減点を課する。

表1 跳越技の変遷

| 年次大会名 | 順位 | 選手名 | 国名 | 1試技目のとび方 | 2試技目のとび方 |
|--------------------------------------|----|-----------|----------|------------------|--------------------|
| 1964年 東京オリンピック大会 | 1位 | チャスラフスカ | チェコスロバキア | 屈身前転とび | 1試技目と同じ |
| | 2位 | ラチニナ | ソ連 | 側転とび | 〃 |
| | 3位 | ラドフラ | 東ドイツ | 前転とび | 〃 |
| | 4位 | 相原 | 日本 | 伸身とび | 〃 |
| | 5位 | ウォルデビッカヤ | ソ連 | まひねり倒立回転とびまひねり | 〃 |
| 1966年 ドルトムント (西ドイツ) 世界選手権大会 | 1位 | チャスラフスカ | チェコスロバキア | 屈身前転とび | 1試技目と同じ |
| | 2位 | ツホルト | 東ドイツ | 〃 | 〃 |
| | 3位 | クチンスカヤ | ソ連 | まひねり倒立回転とびまひねり | 〃 |
| | 4位 | スターク | 東ドイツ | 伸身とび | 〃 |
| | 5位 | クライチロワ | チェコスロバキア | 前転とび | 〃 |
| 1968年 メキシコオリンピック大会 | 1位 | チャスラフスカ | チェコスロバキア | 屈身前転とび | 1試技目と同じ |
| | 2位 | ツホルト | 東ドイツ | 〃 | 〃 |
| | 3位 | ヴォロニナ | ソ連 | 〃 | 〃 |
| | 4位 | クライチロワ | チェコスロバキア | 〃 | 〃 |
| | 5位 | クチンスカヤ | ソ連 | まひねり倒立回転とびまひねり | 〃 |
| 1970年 リュブリアナ ユーゴスラビア世界選手権大会 | 1位 | ツホルト | 東ドイツ | 屈身前転とび | 1試技目と同じ |
| | 2位 | ヤンツ | 〃 | 〃 | 〃 |
| | 3位 | ツリシチェワ | ソ連 | 〃 | 〃 |
| | 4位 | ブルダ | 〃 | まひねり倒立回転とびまひねり | 〃 |
| | 5位 | ワチョワ | チェコスロバキア | 屈身前転とび | 〃 |
| 1972年 ミュンヘンオリンピック大会 | 1位 | ヤンツ | 東ドイツ | 前転とび1回ひねり | 1試技目と同じ |
| | 2位 | ツホルト | 〃 | 屈身前転とび | 〃 |
| | 3位 | ツリシチェワ | ソ連 | 〃 | 前転とび1回ひねり |
| | 4位 | ブルダ | 〃 | まひねり倒立回転とびまひねり | 1試技目と同じ |
| | 5位 | コルプト | 〃 | 屈身前転とび | 〃 |
| 1974年 バルナ (ブルガリア) 世界選手権大会 | 1位 | コルプト | ソ連 | 1回ひねり前転とび | 1回ひねり前転とび1回ひねり |
| | 2位 | ツリシチェワ | 〃 | 前転とび1回ひねり | かかえこみツカハラとび |
| | 3位 | ペルディクローパー | チェコスロバキア | 屈身ツカハラとび | 前転とび1回ひねり |
| | 4位 | グレック | ルーマニア | 〃 | まひねり倒立回転とびまひねり |
| | 5位 | ヘルマン | 東ドイツ | まひねり倒立回転とびまひねり | 1試技目と同じ |
| 1976年 モントリオールオリンピック大会 | 1位 | キム | ソ連 | かかえこみツカハラとび1回ひねり | 前転とび1まひねり |
| | 2位 | ツリシチェワ | 〃 | かかえこみツカハラとび | 1試技目と同じ |
| | 3位 | ドンベック | 東ドイツ | 前転とび前方かかえこみ宙返り | 前転とび前方屈身宙返り |
| | 4位 | コマネチ | ルーマニア | 屈身ツカハラとび | 1試技目と同じ |
| | 5位 | エスチャー | 東ドイツ | 〃 | 〃 |
| 1978年 ストラスブルグ(フランス) 世界選手権大会 | 1位 | キム | ソ連 | 伸身ツカハラとび | 伸身ツカハラとび1回ひねり |
| | 2位 | コマネチ | ルーマニア | 前転とび前方かかえこみ宙返り | 屈身ツカハラとび |
| | 3位 | クレーカー | 東ドイツ | 屈身ツカハラとび | 前転とび前方かかえこみ宙返り |
| | 4位 | シュワント | アメリカ | 前転とび前方かかえこみ宙返り | 伸身ツカハラとび |
| | 5位 | エベルレ | ルーマニア | 屈身ツカハラとび | 〃 |
| 1979年 フォートワース(アメリカ) 世界選手権大会 | 1位 | トルナー | ルーマニア | 前転とび前方かかえこみ宙返り | 前転とび前方かかえこみ宙返りまひねり |
| | 2位 | ザハロワ | ソ連 | 〃 | 前転とび前方屈身宙返りまひねり |
| | 3位 | キム | 〃 | 伸身ツカハラとび | 伸身ツカハラとび1回ひねり |
| | 3位 | クレーカー | 東ドイツ | 〃 | 〃 |
| | 5位 | グナウク | 東ドイツ | 〃 | 前転とび前方かかえこみ宙返り |

表2 跳越技の出現頻度

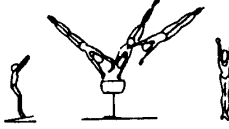
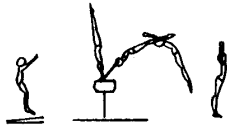
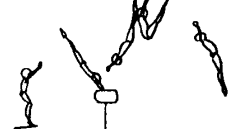
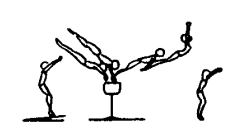
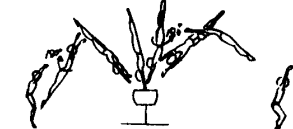
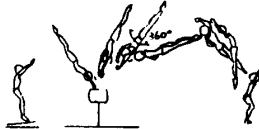

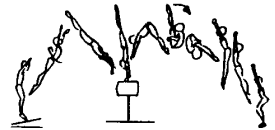
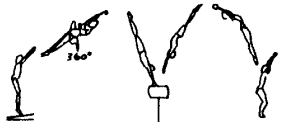




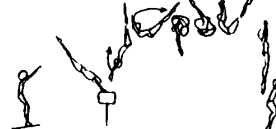
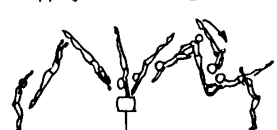



| 年次大会名 | 跳越技 | 出現頻度 |
|---|----------------------|------|
| 1964年 東京オリンピック大会 | 屈身前転とび | 2 |
| | 側転とび | 2 |
| | 前転とび | 2 |
| | 伸身とび | 2 |
| | 1/2ひねり倒立回転とび1/2ひねり | 2 |
| 1966年 ドルトムント (西ドイツ) 世界選手権大会 | 屈身前転とび | 4 |
| | 前転とび | 2 |
| | 1/2ひねり倒立回転とび1/2ひねり | 2 |
| | 伸身とび | 2 |
| 1968年 メキシコオリンピック大会 | 屈身前転とび | 8 |
| | 1/2ひねり倒立回転とび1/2ひねり | 2 |
| 1970年 リュグリアナ (ユーゴスラビア) 世界選手権大会 | 屈身前転とび | 8 |
| | 1/2ひねり倒立回転とび1/2ひねり | 2 |
| 1972年 ミュンヘンオリンピック大会 | 屈身前転とび | 5 |
| | 1/2ひねり倒立回転とび1/2ひねり | 2 |
| | 前転とび1回ひねり | 3 |
| 1974年 バルナ (ブルガリア) 世界選手権大会 | 1/2ひねり倒立回転とび1/2ひねり | 3 |
| | 前転とび1回ひねり | 2 |
| | かかえこみツカハラとび | 1 |
| | 屈身ツカハラとび | 2 |
| | 1回ひねり前転とび | 1 |
| | 1回ひねり前転とび1回ひねり | 1 |
| 1976年 モントリオールオリンピック大会 | かかえこみツカハラとび | 2 |
| | 屈身ツカハラとび | 4 |
| | 前転とび1/2ひねり | 1 |
| | かかえこみツカハラとび1回ひねり | 1 |
| | 前転とび前方かかえこみ宙返り | 1 |
| | 前転とび前方屈身宙返り | 1 |
| 1978年 ストラスブユグ (フランス) 世界選手権大会 | 屈身ツカハラとび | 3 |
| | 伸身ツカハラとび | 3 |
| | 前転とび前方かかえこみ宙返り | 3 |
| | 伸身ツカハラ1回ひねり | 1 |
| 1979年 フォートワース (アメリカ) 世界選手権大会 | 伸身ツカハラとび | 3 |
| | 伸身ツカハラとび1回ひねり | 2 |
| | 前転とび前方かかえこみ宙返り | 3 |
| | 前転とび前方かかえこみ宙返り1/2ひねり | 1 |
| | 前転とび前方屈身宙返り1/2ひねり | 1 |

1972年度版（種目別選手権）
この年は1968年度版と同規則である。

1975年度版（種目別選手権）

①2回の跳越は異ならなければならないし、
そのうち一方は少なくとも1/2長体軸ひねり以上の
跳越でなければならない。

図1 各 跳 越 技

| | |
|--|---|
| <p>側 転 と び</p>  | <p>前 転 と び</p>  |
| <p>屈 身 前 転 と び</p>  | <p>伸 身 と び</p>  |
| <p>1/2 回 ね り 倒 立 回 転 と び 1/2 回 ね り</p>  | <p>前 転 と び 1 回 ね り</p>  |
| <p>か か え 込 み ツ カ ハ ラ と び</p>  | <p>屈 身 ツ カ ハ ラ と び</p>  |
| <p>1 回 ね り 前 転 と び</p>  | <p>1 回 ね り 前 転 と び 1 回 ね り</p>  |
| <p>前 転 と び 1/2 回 ね り</p>  | <p>か か え こ み ツ カ ハ ラ と び 1 回 ね り</p>  |
| <p>前 転 と び 前 方 か か え こ み 宙 返 り</p>  | <p>前 転 と び 前 方 屈 身 宙 返 り</p>  |
| <p>伸 身 ツ カ ハ ラ と び</p>  | <p>伸 身 ツ カ ハ ラ と び 1 回 ね り</p>  |
| <p>前 転 と び 前 方 か か え こ み 宙 返 り 1/2 回 ね り</p>  | <p>前 転 と び 前 方 屈 身 宙 返 り 1/2 回 ね り</p>  |

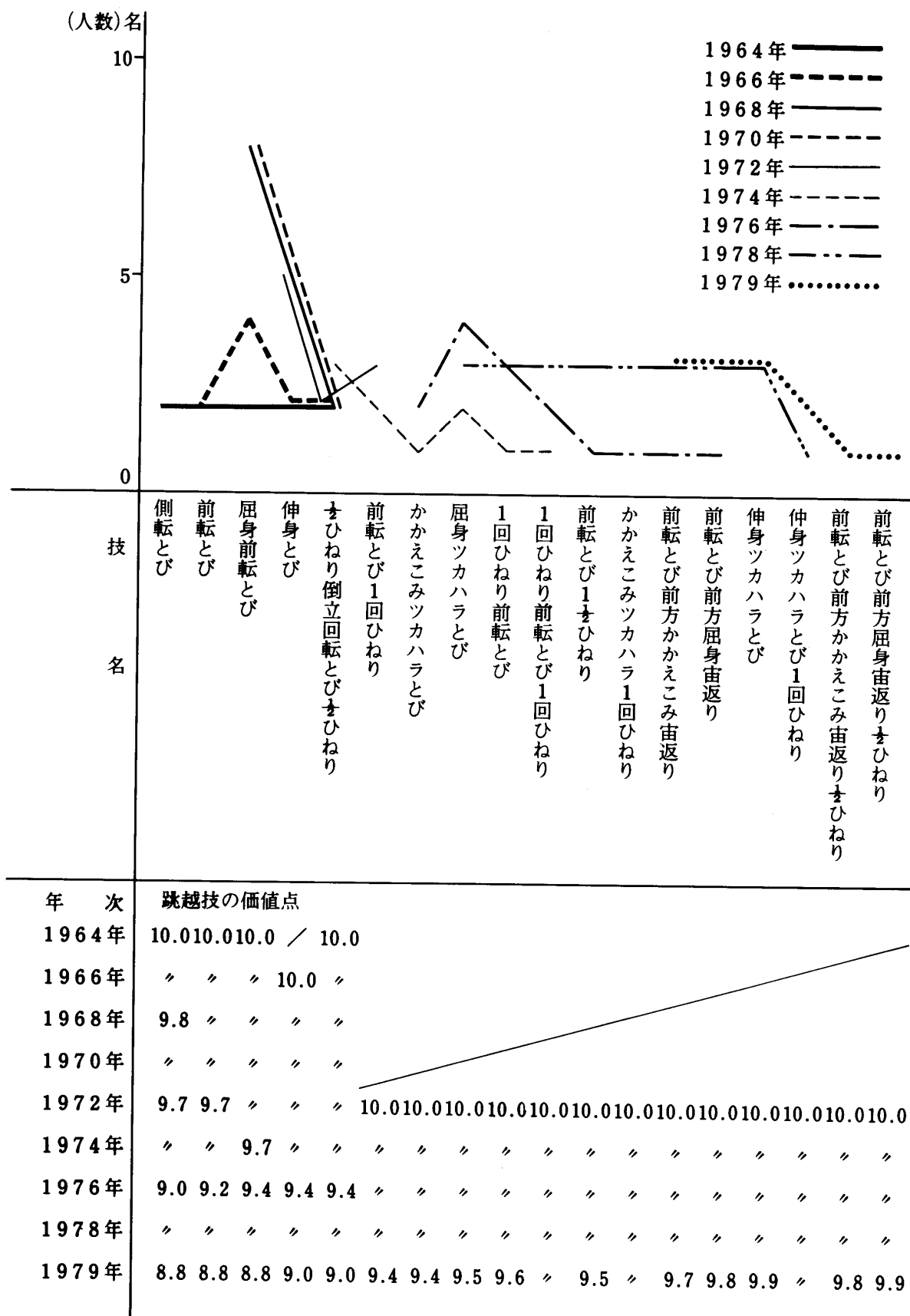


図2 跳越技の出現経過と価値点の変化

② 2回の跳越は10,00満点のものでなければならぬ。

③ 跳越が明示された番号と異なる跳越をした場合は0.5の減点を課する。

④ 1回の跳越しか実施しなかった場合1.0の減点を課する。

⑤ 一方の跳越でひねりが伴わなかったり10,00満点の跳越でなかった場合1.0の減点を課する。

⑥ 2回とも同じ跳越を実施した場合1.0の減点を課する。

1977年度版 (種目別選手権)

この年は1975年度版と同規則である。

1979年度版草案 (種目別選手権)

① 2回の跳越がC難度を持つもので異ならなければならない。

② 最終得点は2回の跳越得点の平均で算出される。

③ 明示された跳越番号が跳越と異ると0.5の減点を課する。

④ 1回のみ跳越の場合は、実施された跳越の得点を $\frac{1}{2}$ した点数が最終得点となる。

⑤ 2回とも同じ跳越をした場合は、2回目の跳越は0.0点になり、1回目の得点を $\frac{1}{2}$ した点数が

最終得点となる。

⑥ Bグループの跳越をした場合は0.5の減点

Aグループの跳越をした場合は1.0の減点

この様に規則が少しずつ改正されてきているが、この理由として次の二つがあげられる。

① ピット (体操競技練習用ピット) が開発され、安全性が高まり、難度の高い跳越技を練習する事が出来る様になった。

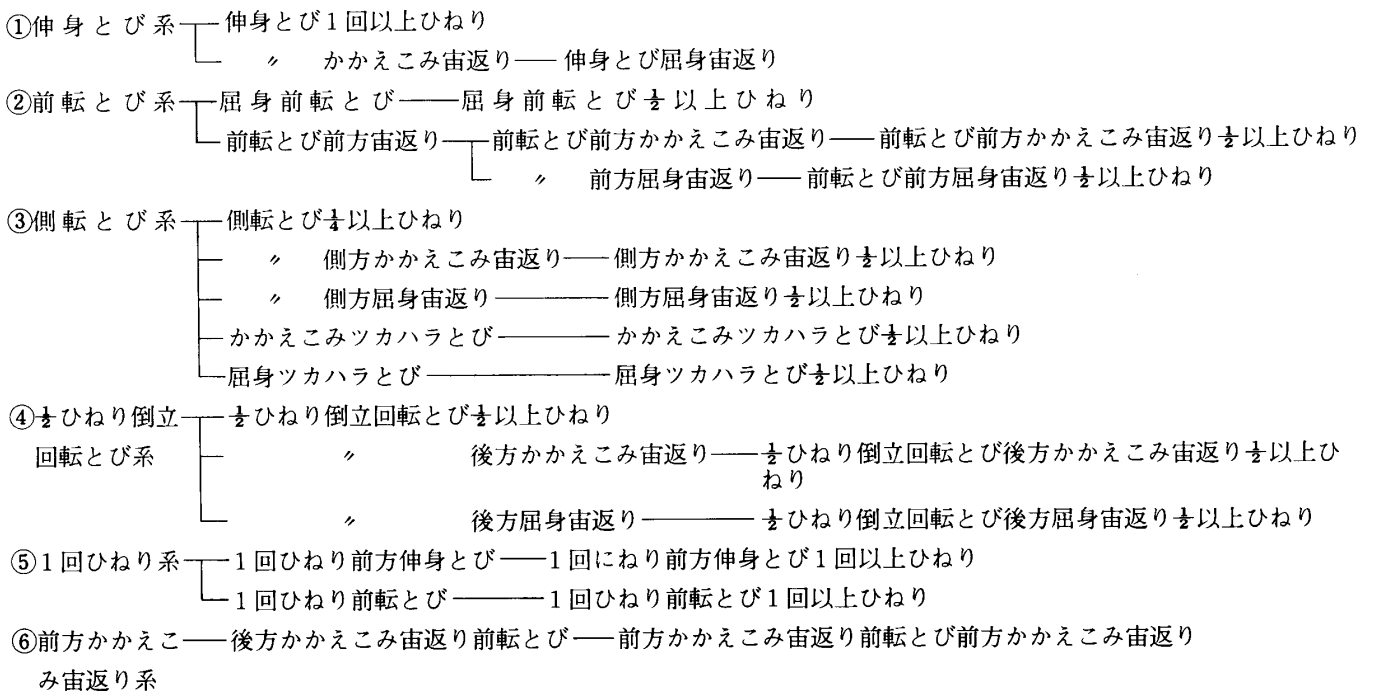
② ロイター板のばねを強くし、板を高く開発して、練習に使用し、難度の高い跳越技を練習する事が出来る様になった。(試合ではロイター板はかわっていない。)

この開発により難度の高い跳越技を試合で試技する選手が出て来た為に、規則の改正へととなった。

表3は跳越技の発展を示したものである。系のところは第1飛躍である。第1飛躍 (以下前半という。) というのは、ロイター板をけてから跳馬に手がつくまでの飛躍をいう。前半から第2飛躍に発展している。第2飛躍 (以下後半という。) というのは、跳馬に手をついてから着地するまでの飛躍をいう。

規則の改正と、跳越技の発展とから、どの様に跳越技が変遷してきたか詳しく述べる事にする。

表3 跳越技の発展



1964年では現在では基本技とされている跳越技が試技されていた。10点満点の価値が与えられていた。1966年も同規則であった。1968年で価値点に変化が出てきた。例えば1964年第2位のラチニナ選手が試技した側転とびの価値点は9.8になり、やさしい技には10点の価値点が与えられなくなった。1968年に出場した上位選手は全員10点の価値点技を試技している。だが他の選手の中には10点の価値点技を試技出来ない選手もいた。1972年ではさらに後半に技巧を加えた跳越技が出てきた為に、1964年の側転とびは9.7満点、前転とびも9.7満点になった。屈身前転とびの価値点は9.7になり、上位では1人も試技する選手がいなかった。1976年には技巧がさらに加えられてきた。ここで大幅に規則が改正されている。

I グループからVグループまでに別けられた。

I グループ——前進とび系

II グループ——前転とび系
 山下とび系

III グループ——長体軸のひねり系

IV グループ——左右軸の回転系

V グループ——左右軸回転と長体軸ひねりの
 コンビネーション

この様に系統づけられた。価値点も4年前までは最高技術と考えられていた価値が大幅にさがってしまった。ますます後半に技巧を加え、1972年では考えられなかった跳越技が試技されている。1979年にはさらに高度化し、1980年には大幅に規則が改正され様としている。

以上のように体操競技における技術の変遷と規則の改正との間には密接な関係のある事が考えられる。

次に跳越技に対する採点をどの様な観点からみていき、どの様にかわってきたかを述べてみる。1964年1位になったチャスラフスカは屈身前転とびを試技した。この技は2年前に日本男子選手の山下（現松田）選手が自分で考案し、試技をした。チャスラフスカはこの技を取り入れ、1964年には女子で始めて、又1人だけこの屈身前転とびを試技した。当時は技巧を加えるものは少なかったのが後半で屈身するというのは技術的に大変難かしとされていた。前半と後半のリズムや大きさ、

高さがほとんど同じだったのが、後半に技巧を加える様になると、今までの考え方を少し改めなければいけなくなった。つまり、前半と後半のリズム、大きさ、高さは違ってくるという事である。

1966年ではチャスラフスカとツホルトの2人が屈身前転とびを試技した。チャスラフスカは前半と後半のリズム、大きさ、高さがほとんど同じである。ツホルトは後半にポイントをおき、前半と後半のリズムをかえて前半で鋭どく、早く跳馬に手をつき、後半で大きさを出した。

1968年、屈身前転とびを試技したのは5人中4人もいた。その為、ただ跳ぶだけでは高得点を得る事が出来なくなった。2人ずつ、チャスラフスカとツホルトの跳び方をしていた。まとめの上手なチャスラフスカが1位になったが、技巧としては、後半にポイントをおいた跳び方に好感が持たれた。この技巧で跳ぶ為には、脚・腰のより一層の強さが要求され、後半のまとめ方が難かしくなり点数的に低くなったものと思われる。

1970年は屈身前転とびを試技したのは4人いた。この大会では後半にポイントをおいた方が高得点がでた。この大会では、屈身前転とびが主流をなし、もうこれ以上の跳越技は出てこないのではないかと考えられた。

1972年ではさらに後半に1回ひねりを加えた跳越技を試技した。はじめての時は、後半でのひねりが少々悪くても高得点になった。

1974年では、前半と後半に1回ひねりをいれた跳越技を試技した。後半での変化は発展してきているが、前半での変化はあまりみられなかった。この原因として、前半に技巧を加えると、後半が難かしくなる為と思われる。この大会でツカハラとびが試技された。4年前に日本男子の塚原選手が考案したものである。この大会では、0ポイント（上昇から下降するまでの接点）が低くても、ツカハラとびらしければ高得点が出た。2名のみの試技であった。

1976年では、発展はめざましく、ツカハラとびに1回ひねりを加えたものが試技された。この大会では、いかに0ポイントに到達するか、又、より高く、より大きくならないと高得点が得られなかった。この大会での新技として前転とび前方宙

返りが試技された。

1978年、1979年にはさらに変化技が出てきた。又新技でもよいとび方でないと高得点を得る事が出来なくなってきた。1968年には考えもつかなかった新技が考案されてきた。

ま と め

以上女子の跳越技の変遷を述べてきたが、1979年フォートワース大会の男子跳馬において、前転とびかかえこみ3回宙返りが試技された。この事から今後女子においても、この様な新技が出てくる事が考えられる。どんな新技が出てくるか楽しみであると共に、これ以上のものが本当に出てくるのか不安に思う事もある。

参考文献

- 1) 日本体操協会規集 日本体操協会編集
1968年度版
1972年度版
1975年度版
1979年度草案